

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 26 日現在

機関番号：32664

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02207

研究課題名(和文)南宋における道学運動展開の基礎的研究

研究課題名(英文)Basic research on the development of Daoxue movements in the Southern Song Dynasty

研究代表者

市来 津由彦 (ICHIKI, Tsuyuhiko)

二松學舎大學・文学部・教授

研究者番号：30142897

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：いわゆる朱子学は、「理」から世界とわが身を捉えることを核心とする。この思考枠組は、北宋の道学の、特に二程が定立したものである。本研究は、南宋における中国近世儒学思想の展開を、この二程による思考枠組が展開した道学運動として捉えるものである。

本研究は、朱子学の思考および二程解釈の理解を精密にすることをはかった。そして南宋の士大夫への道学の共感の度合いをはかる基準として、孟子への彼らの言及を探查した。探查にあたっては、北宋の道学の直接の系譜の人々と、朱熹に関わる道学周縁の人々とに分けて追跡した。探查の結果、二程の孟子論との距離により南宋士大夫への道学の浸透度がはかれることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は二程(程顥・程頤)の「像」から南宋の道学の展開を見直す。思想は時々社会現象に対応すると同時に、特定の思考枠組や理念的側面を持ち、その思考枠組から社会現象を評価する。思想の力はその枠組にある。結果としての事実現象的な現象にとどまらず、その思考枠組の展開を捉えることが、思想史の記述には要請される。道学という思考枠組を開いた二程の思想の共通面と兄弟の表現の相違面に着目し、二程の像を評価基準とすることは、この要請に応えるものである。

また、対象は南宋期にとどまるが、本研究の視点は朝鮮朝、江戸儒学の評価基準としても応用でき、近世東アジアの儒学思想運動という視点の思想史の記述にも有用である。

研究成果の概要(英文)： The core of Zhuzixue is to capture the world and ourselves from "Principle." This framework of thinking is established in Northern Song Daoxue, especially in the Cheng-Hao, Cheng-Yi brothers. The aim of this study is to grasp the development of Chinese early modern Confucianism in the Southern Song Dynasty as a Daoxue movement developed by the thinking framework of Cheng brothers.

This study sought to refine the understanding of Zhuzixue's thinking and Cheng brothers, and explored their references to Mencius as a measure of the degree of sympathy for the Southern Song Dynasty scholar officials in Daoxue. In the exploration, I divided and tracked the people into those who have a direct lineage of Daoxue in the Northern Song and the people in the periphery of the Daoxue related to Zhu Xi. As a result of the exploration, it was found that the degree of penetration of Daoxue into the Southern Song Dynasty scholar official can be measured by the distance from the theory about Mencius.

研究分野：中国哲学

キーワード：二程子 道学 南宋 朱子学 孟子

1. 研究開始当初の背景

(1) 元代以降、いわゆる朱子学が東アジアの広域で思想文化に多大な影響を及ぼす。元代以降に足場を置くとその「朱子学」(狭義の道学)が存在するということが、ともすると自明のこととなる。しかしその学が南宋・金代に中国で広がりを見せたことの経緯と理由について、明晰な説明はなお与えられていない。11世紀北宋道学の12世紀南宋代における展開としての朱熹思想の思考法のそもそもの形成、朱熹の社会活動の現場、朱熹思想を支持する者のその支持や受容の理由(旧著『朱熹門人集団形成の研究』はこの一端の解明を試みたもの)、その再生産の心性、朱熹没後の朱熹思想資料の形成と伝承など、12、13世紀のいわゆる朱子学(「朱子学」という語彙も明以前にはほとんどみられない)に関わる思想文化現象について、自戒も込めてであるが、充分にわかっていないことが多い。政治的・社会的その伸張については資料的に追跡可能なことが多くある。しかし朱熹思想や資料の受容とか支持の心性ということなどは、視点の工夫が必要である。南宋の前期、中期、後期と時期ごとに主要課題が異なって展開するが、上記の諸課題についての整合性をもった総合的究明が要請されている。

(2) 「朱子学」につながる「道学」の思考枠組を確立したのは、北宋の程顥・程頤の兄弟である。その北宋道学の南宋における展開の中で二程の像が多様化しつつ、思想傾向の評価基準となる二程像を南宋中期に朱熹が形成する。すなわち、北宋の程門の主要高弟は二程の思想傾向をあまり区別せず兄の程顥の思想を基調として二程を受容し、南宋初期はその延長にあった。これに対し南宋中期になると、程氏資料を整理した朱熹が自身の表現志向と重なる弟の程頤の思想表現を発見しこれに共振し、程頤の用語法に沿って自身の思想を『四書章句集注』として注釈解説説明的に表現し流布させることを試みた。また解説説明的な表現を(資料上では)とらない兄の程顥の思想表現には距離を置く。さらに南宋中期に広義の道学圏に同じくおり朱熹思想を批判していた陸九淵は、資料上の言及は多くはないが程顥を褒め程頤を貶する評価を明言する。この朱陸両学の相互批判も絡まって、かくて朱熹の二程像が朱熹後学の評価基準となっていく。

明代に至ると、その半ばに登場した王守仁の心学が南宋の陸学を顕彰し、いわゆる朱子学の二程像に対し程顥を優位に置く二程像を唱える。この王守仁心学と朱子学派の論争の中で源から「学」の本質を確認すべく二程資料抄物がいくつか作成されもした。明代中期以降、中国における近世士大夫儒学思想のこうした論議は朝鮮朝、日本江戸儒学にも移入され、それぞれ展開した。

以上は申請者の前科研費研究(25370046)の概要である。ただし個別要素の部分探査に終わり、まとまった成果を報告するには遺憾ながら至らなかった。中国近世儒学を思想内容からみるときに、二程の像という要素から南宋の道学の伸張を検証すべくあらためて企画したのが、本研究である。

2. 研究の目的

本研究は、いわゆる朱子学の形成と展開を柱としつつ、南宋における中国近世儒学思想の展開を、北宋道学の二程思想の思考枠組が展開した南宋の道学運動として捉え、明代までを射程に入れつつ、南宋の前期、中期、後期とに時期を分けて二程及び二程の言説への諸人の言及を追跡し、「程子」像の視点を加味して中国近世思想史を新たに見直すことを課題とする。二程像を評価基準としてみることは、朝鮮朝、江戸儒学の思考枠組をはかるにも応用可能であり、近世東アジアの思想運動という視点からの思想評価基準として一つの視座となると考えられる。

3. 研究の方法

(1) 『朱子語類』巻95-97「程子之書」の解説と、二程の程頤に共振する朱熹の思考法の確認

① 研究期間を通して『朱子語類』巻95-97「程子之書」の訳注をおこなう。主として朱熹五十代からの学術談話録である『語類』の言葉は、『四書章句集注』のような、構成して作り上げた思想の言葉ではない。「程子」についての朱熹と朱門の、未整理のさまざまな生来の問題意識が問答の場面に立ち現れ、その矛盾やゆらぎの中に研究的問題を多くうかがうことができる。期間終了後も解説は続く。

② 二程のうちの弟の程頤に共振した朱熹の思考法の特色について確認する。

(2) 程学の浸透と南宋士大夫諸人の「程子」像

南宋中期の朱熹と朱門の形成以前の南宋前期の程門および程学系人士の展開とその二程像、程学言説を探査する。および南宋前期における程門を越えた士大夫の二程論とその思想内容に関する言説を探査する。また、朱熹と同時代から南宋後期にかけての著名士大夫における二程への言及を探査する。これらの結果に関して、すでにおよその見通しがついている朱熹・陸九淵らにおける二程像との距離、位置関係を明らかにする。

(3) 南宋における「程子」像と孟子論

以上の計画では探査内容が程学系人士内部にとどまる可能性が高くなることが予測され、研究期間の一年を過ぎ、程学系人士の外部との境界人網とその人士の二程像の探究が必要と考えるに至った。朱熹を柱としていうと、その境界の人士とは、朱熹と関わりがあるが程学系ではない官界人士がこれにあたる。さらに北宋末からの人網の流れに遡ると、北宋末の程学派による王安石新法党系人士(「王学」派)批判人脈、南宋初の主戦派・講和派の人士人脈が浮上する。この北宋末から南宋前期までを

通貫して程学系と境界人網の思考の傾向をうかがう指標にし得るのが、北宋にほとんど突然に浮かび上がり、それぞれ異なる視点だが程学派も王学派も重視する孟子である。程学系外部との境界人網も含め朱熹思想形成期の道学の展開様態を、南宋前期の士大夫の孟子論議によりはかることができると予想される。二程像からみる南宋における道学の展開という本研究を、北宋の孟子論からたどり、この孟子論の視点からかたちあるものにしよと考えるに至った。

ただし遅延していた本研究をこの新たな企画で進めていた 2019 年度末からコロナ感染状況に関する教育課題対応に追われ、研究期間の延長をはかるも、探査した内容の概要を口頭発表したところで結果的には期間終了となった。以下、(1)①②に対応する刊行物の一部と(3)に対応する刊行物および口頭発表の内容とを、本「3. 研究の方法」に沿って(1)～(3)と構成して「研究成果」の説明とする。

4. 研究成果

(1) 朱熹と朱門における「程子」解釈の解説：「3. 研究の方法」(1)①に対応

○広島大学朱子語類研究会『朱子語類』巻九十五「程子之書 一」訳注稿(一) - (八)、広島大学東洋古典学研究会『東洋古典学研究』第 44-52 集、2017. 10-2021. 10 (不定期掲載。継続中)

本「訳注稿」は、朱熹と朱熹門人との学術談話の記録である『朱子語類』巻 95-97「程子之書」のうちの巻 95「程子之書 一」の日本語訳注である。「程子之書」箇所は、南宋中期に朱熹が編集し朱門が共有する北宋の二程の資料(『河南程氏遺書』・『外書』・『文集』など)の言葉について、主として朱門の人士が疑問点を朱熹に質し、朱熹が答えるという往復問答群から成る。

二程の兄の程顥と弟の程頤の思想には共通面も多いが思想表現の傾向には相違がある。朱熹は程頤寄りで自身の思考法を構成し朱門もその思考枠組の中にある。そのため朱門は兄の程顥の言葉や思想の理解に抵抗を覚えて朱熹に質問する。程頤の延長に立ちつつ程顥の表現との整合をはかりこれに答える朱熹の答え方に、朱熹の思考法が浮かび上がる。特に上記掲載の中では、「訳注稿」(四) - (六)における、程頤語と一般にはみられる『河南程氏遺書』巻 1 第 56 条をめぐる「程子之書 一」第 35-61 条の問答が、程頤寄りに足場を置き、孟子「性善」説の「性」を「気質の性」と「本然の性」とに分けて関係づける思考を重ね、程顥と程頤の相違を会通させる朱熹の苦心が浮かび出ていて興味深い。

(2) 朱熹の思考法と程学：「3. 研究の方法」(1)②に対応

①「朱熹における四書注釈の「説明」と実践知の所在」、京都大学中国哲学史研究会『中国思想史研究』第 39 号、2018. 3

朱熹『四書章句集注』の注釈による「説明」の構造とその説明が要請する「実践」の場との関係を検討した論考。朱熹の四書注釈は学知的「説明」として理解できるように作成されている。「説明」という場にのりにくい実践知の領域の問題の所在とか、人間存在の根拠がヒトに具わる具わり方といった、感覚知覚によってではなく思索の上で論理的思弁的にしかたどれない「形而上」の問題の所在とかの指摘がその「説明」に組み込まれているところに、その特色がある。その「説明」は、朱熹の主観としては、説明を知的に理解して終わるものではなく、人生を生きる現場で実践に向かうことを読む者に要請するものであった。またそうした実践志向を含む「説明」は、「説明」に完結させる近代学知の説明と異質なものであり、この相違を踏まえることが、中国近世思想の現代からの理解の誤解を防ぐことを指摘した。

構成：はじめに／一 『大学』三綱領・「曾子一貫」注釈にみる解説「説明」／二 「説明」のための装置—修辭の範型と概念／三 実践知の所在／四 『伝習録』の言葉から省みる／五 近代学知の「説明」

※ 実践を志向しつつ「説明」を徹底化する思想表現は、二程では弟の程頤に重なる。

②「如何解釈朱子学“格物”説之“理”—以荒木見悟《新版 仏教与儒教》为中心(陳堯傑中訳)、呉震・申緒璐主編『中国哲学的豊富性再現—荒木見悟与近世中国思想論集—』上海古籍出版社、2021. 11

「理」から世界とわが身を捉える思考枠が、北宋道学、特に二程が定立した思考法のパラダイムといえる。弟の程頤が兄弟のこの「理」の思想に「説明」の言葉を与える。その延長の南宋の朱熹段階において「理」の説き方が多様化する。多様な理のその言説は、説明の目的が異なる「太極論」、「理一分殊論」、「格物」説の「所以然/所当然の理」論という三つの系譜に分けられる。朱熹の「説明」は説明の対象を二項的に分けてその相関を説くことで事象をおおう方式を多くとる。これら各系譜の「理」も、二項的相関として説明される。そのときに例えば「所当然の理」に対する「所以然の理」が「太極」の理と重なるようにみえたりする。しかし重なりを性急に追うと元の趣意から離れかねない。「理」を説く朱熹の文脈と目的に戻って資料を捉えていく必要がある。論考の後半で以上のことを説いた。

構成：序言／一 学習荒木書中の朱子学論述／二 朱熹「格物」説的「理」之説明—“所当然、所以然”的理的性格／結論

(3) 孟子からみる：「3. 研究の方法」(2)(3)に対応

①『孟子』の北宋を読み解く、田中正樹編『中国古典学の再構築』汲古書院、2021. 2

戦国時代の孟子思想を保存した『孟子』は三国から唐代まで思想史の表舞台から退いていたが、北宋になって注目され、その後は脚光を浴びつつける。ただし北宋以後の評価内容は一様ではなく変化がある。本稿は、王安石の新法党政権政策の中で孟子が北宋に表舞台に立った経緯を確認し、一方、王安石学派とは異なる視点から同時代に『孟子』を読み込んだ二程の独特の解説を、『朱子語類』「訳

注稿」の項で先に述べた『河南程氏遺書』巻1第56条の表現に主として拠りつつ抽出し、王安石の孟子顕彰およびその性説との同異を考察する。『孟子』の多様な面の中で「性善」説に関わる心性論面に特化して孟子を顕彰し、かつ「性善」の根拠を『中庸』に見出し『孟子』と『中庸』を一体的に捉えるところに、二程の特色がある。また、「性善」説に着目する程学のこの思考は北宋末に社会の表に出るが、資料のあり方からすると、王安石生前の新法政策期にすでに唱えられていたことが重要である。

構成：はじめに／一 王安石の孟子顕彰と孟子「経」化の道／二 性説の場／三 二程における孟子「性善」説／むすびにかえて—南宋初へ

②「南宋前期における道学系孟子論の展開」、口頭発表、宋代史研究会2020年度研究会、2020.8.31。オンライン開催。未刊行。

本発表は、南宋前期の道学系人士および道学周縁人士における孟子論の様態を第一次的に探査したものであり、①の『孟子』の北宋を読み解く(2019.6口頭発表)の延長に位置づく。

王安石新法党政権によって孟子が顕彰され、論語とセットで科挙にも出題された。道学派の孟子注釈とともに、王安石学派による孟子注釈が通行したことが、南宋の書目に確かめられる。しかし南宋政権が王安石新法党政権の破綻を出発点とし、南宋以降の史書が新法党政権を排除する編集がなされ、元以降、王学派による孟子注釈は亡びた。ただし南宋初期からまったく排されたとは考えられず、道学系の孟子論が盛んになるとともにしだいに後退したとみられる。

その道学系の孟子論は、二程とその直門のところでみれば、上記①のように「性善」説に関わる心性論面にかなり特化するという特異性を持つ。この点に注目すると、孟子の使用、特に「性善」説論に傾くか否かにおいて、二程の道学の南宋士大夫への浸透度をはかることができるとみられる。また、政治論的使用の場合は、北宋末の延長的使用ということが予測される。

本発表はこうした視点で、朱熹の没年までを射程におき、道学直系人士と道学周縁人士とに調査対象を仮に分けて、その代表的人物の主に文集における孟子言及とその内容を探査したものである。

ここでいう道学直系人士は、南宋初時点であれば二程再伝の人士にあたり、さらに胡安国以下の胡氏の学系、および楊時、羅從彦以下、朱熹に至る人士を指す。また朱熹の思想形成および思想吟味論議に深く関わった人も入れることとする。呂祖謙や陸九淵や事功派人士もここに入れる。道学周縁人士は、以上の直系以外の二程再伝の人につながる人士、また南宋淳熙年間半ばと末年になされた、政治的に朱熹を弾劾する動きに対し弁護にまわった人士らを主に指す。ただしこの特に後者の定義では政治の視点が前面に出てしまう。政治的立場でなく思想内容からみた朱熹の道学との距離、位置関係が問題である。この趣旨からここでは、朱熹の文集の書簡宛人であつた文集内で言及が多くて(相互批判も含め)交流がある同時代士大夫文化人で孟子に多く言及している人、かつ前述の道学直系人士、また朱熹の親族・近縁者、朱熹門人らを除く人士という方式で抽出した。

以上から道学直系人士の孟子論としては、楊時(朱熹『孟子集注』巻前「孟子序説」所収の『龜山集』巻12「語録三 余杭所聞」の語)、朱熹(『孟子集注』)、張九成(『孟子伝』)、胡宏(『知言』)、張栻(『癸巳孟子解』)、呂祖謙(『麗沢論集説』：男の喬年による祖謙語録)、陸九淵(『象山集』書簡)、葉適(『習学記言』「孟子」)を取り上げ、「不忍心之心」・惻隱の心論を中心に検討した。程顥と程頤の傾向の分離が朱熹において定立するとみると、孟子「性善」説に言及することは共有していても、南宋初から中期の展開の中で、多様な言い方ながら、体感を媒介に「性善」を確言する程顥的な思想の表現傾向が多く認められ、その意味では注釈において解説的に「説明」する朱熹の表現はやや特異である。なお葉適は、「不忍心之心」の語も宋という現代のものではなく、戦国の問題とみるべきとする。

道学周縁人士の孟子論としては、楊万里(『誠齋集』「心学論」)、林之奇(『拙齋文集』)、王十朋(『梅溪集』)、周必大(『文忠集』)、韓元吉(『南澗甲乙稿』)らを取り上げ、各々の文集の孟子論、性論関係の文章を検討した。程頤の思想表現の敷衍的な論が全体的に多いが、楊万里は程顥的な体感を踏まえる思想表現を強くとる。周必大は性論に特化するのではなく、『孟子』が持つ多くの面を全般的に使用する。楊と周はともに江西吉州の人で親交があるが、孟子の使用において南宋後期に伸張する朱熹の道学とはやや距離があり、両者に対する書簡においても朱熹が距離を置いていることが確認できる。

以上、南宋の前期、中期までだが、北宋後期に孟子が顕彰され、その孟子解釈として二程の道学派が孟子を総体としてではなく、これを分解し自身の立場に有効な側面に特化して使用する。また二程においては思想の表現方式に相違がある。このことに注目すると、孟子論が南宋前期における程学道学の浸透度をみる指標として使えることがうかがえる。

なお、この探査を進めるには、科挙における孟子論の動向の調査も必要である。亡びた王安石系孟子注釈の発掘も肝要であり、近年このことも開始されていることを付言する(梶田祥嗣氏2021年度宋代史研究会口頭発表)。この課題も含め追跡と検討が必要な問題が口頭発表後にいくつか現出し、以上の報告の刊行は、遺憾ながら研究期間終了後の今後となる。

※ 本研究と同時期に刊行され参照したもののだが、福谷彬『南宋道学の展開』、京都大学出版会、2019.3が、南宋道学内部の孟子使用の諸相について、本研究と半分重なり半分別の視点で秀れた論議をし、小林義廣『南宋江西吉州の士大夫と宗族・地域社会』、汲古書院、2020.10(の関連初出論文)が、楊万里、周必大らの社会活動を社会史の広い視野から探究する。ここに記して謝意を表す。

構成：はじめに／1 北宋末から南宋初と孟子 (1)科挙における孟子の継承と高宗、(2)南宋初における二程語録資料の伝承／2 南宋前期道学系人網と孟子 (1)南宋前期道学系人網、(2)南宋前期道学系人士における孟子 —「不忍人之心(惻隱之心)」・「性善」を中心に／3 南宋前期道学周縁人士と孟子 (1)南宋前期道学周縁人士-朱熹との関わりにおいて、(2)道学周縁人士の孟子論管見-朱熹との関わりを事例として／むすびにかえて

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 市來津由彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 如何解釈朱子学“格物”説之“理” 以荒木見悟《新版 仏教与儒教》為中心（陳堯傑中国語訳）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 呉震・申緒（王+路）主編『中国哲学的豐富性再現 荒木見悟与近世中国思想論集』上海古籍出版社	6. 最初と最後の頁 124-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市來津由彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 『孟子』の北宋を読み解く	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 田中正樹編『中国古典学の再構築』汲古書院	6. 最初と最後の頁 185-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市來津由彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 Die Menschenlehre des neuzeitlichen Konfuzianismus in Ostasien als Boden für die Übernahme der modernen Menschenanschauung in der ersten Hälfte der Meiji-Zeit (1868-1895) Japans (後藤弘志独語訳。日語原題: 東アジアにおける近世儒教の人間論 日本の明治期前半 (1868-95) における近代的人間観受容の土壌として)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 M.Quante, H.Goto, T.Rojek, S.Segawa編『Der Begriff der Person in systematischer wie historischer Perspektive: Ein deutsch-japanischer Dialog』(mentis)	6. 最初と最後の頁 251-278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市來津由彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 如何解釈朱子学“格物”説之“理” 以荒木見悟《新版 仏教与儒教》為中心（陳堯傑中国語訳）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国哲学的豐富性再現 荒木見悟与中日儒学国際研究会会議論文集（予稿集・復旦大学哲学院・復旦大学上海儒学院）	6. 最初と最後の頁 20-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市來津由彦	4. 巻 64
2. 論文標題 朱熹の跋文における「感情」の表象	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 國學院中國學會報（國學院大學中國學會）	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市來津由彦	4. 巻 39
2. 論文標題 朱熹における四書注釈の「説明」と実践知の所在	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国思想史研究（京都大学中国哲学史研究会）	6. 最初と最後の頁 1-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市來津由彦	4. 巻 43
2. 論文標題 朱子学の言葉・陽明心学の言葉	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東洋古典学研究（広島大学東洋古典学研究会）	6. 最初と最後の頁 109-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広島大学朱子語類研究会 市來津由彦・望月勇希	4. 巻 52
2. 論文標題 『朱子語類』卷九十五「程子之書 一」訳注稿（八）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋古典学研究（広島大学東洋古典学研究会）	6. 最初と最後の頁 73-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広島大学朱子語類研究会 市來津由彦	4. 巻 51
2. 論文標題 『朱子語類』巻九十五「程子之書 一」訳注稿(七)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋古典学研究(広島大学東洋古典学研究会)	6. 最初と最後の頁 125-138
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広島大学朱子語類研究会 市來津由彦	4. 巻 49
2. 論文標題 『朱子語類』巻九十五「程子之書 一」訳注稿(六)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋古典学研究(広島大学東洋古典学研究会)	6. 最初と最後の頁 145-161
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広島大学朱子語類研究会 市來津由彦・望月勇希・渡部雄之	4. 巻 48
2. 論文標題 『朱子語類』巻九五「程子之書 一」訳注稿(五)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋古典学研究(広島大学東洋古典学研究会)	6. 最初と最後の頁 65-80
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広島大学朱子語類研究会 市來津由彦	4. 巻 47
2. 論文標題 『朱子語類』巻九五「程子之書 一」訳注稿(四)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋古典学研究(広島大学東洋古典学研究会)	6. 最初と最後の頁 135-149
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広島大学朱子語類研究会 大井さき・望月勇希 監修 市來津由彦(訳注担当なし)	4. 巻 46
2. 論文標題 『朱子語類』巻九五「程子之書 一」訳注稿(三)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋古典學研究(広島大学東洋古典学研究会)	6. 最初と最後の頁 129-143
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広島大学朱子語類研究会 市來津由彦・望月勇希	4. 巻 45
2. 論文標題 『朱子語類』巻九五「程子之書 一」訳注稿(二)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋古典學研究(広島大学東洋古典学研究会)	6. 最初と最後の頁 157-179
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広島大学朱子語類研究会 望月勇希・市來津由彦	4. 巻 44
2. 論文標題 『朱子語類』巻九五「程子之書」訳注(一)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東洋古典学研究(広島大学東洋古典学研究会)	6. 最初と最後の頁 131-151
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 3件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 市來津由彦
2. 発表標題 私の宋明思想研究40年
3. 学会等名 宋明思想研究会(早稲田大学理工学術院・創造理工学部・社会文化領域主催)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 市來津由彦
2. 発表標題 南宋前期における道学系孟子論の展開
3. 学会等名 宋代史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 市來津由彦
2. 発表標題 『孟子』の北宋を読み解く
3. 学会等名 21世紀における『孟子』像の新展開「中国古典学と孟子」（二松學舎大学東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト・SRF 共催シンポジウム）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 市來津由彦
2. 発表標題 如何解釈朱子学“格物”説之“理” 以荒木見悟《新版 仏教与儒教》為中心（陳堯傑中国語訳）
3. 学会等名 中国哲学的豐富性再現 荒木見悟与中日儒学国際研討会（復旦大学哲学院・復旦大学上海儒学院）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 市來津由彦
2. 発表標題 朱熹の跋文における「感情」の表象
3. 学会等名 國學院大學中國學會第61回大会公開講演（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 市来 津由彦
2. 発表標題 朱子学の言葉・陽明学の言葉
3. 学会等名 白山中国学会第13回研究発表大会基調講演（東洋大学）（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関